

日蓮大聖人御書全集

しもんぶつじょうぎ

始聞仏乘義

新版
1325
〜
1328

しもんぶつじょうぎ

始聞仏乘義

けんじ ねん がつ にち さい と き じょうにん

建治 4 年 ('78) 2 月 28 日 57 歳 富木常忍

せいふしちゆい かしゆう こうしゆう おく おんごころざし ひも

青鳧七結、下州より甲州に送らる。その御志、悲母の

だいさんねん あいあ ごごうよう

第三年に相当たる御孝養なり。

と しかん みようじよう

問う。「止観の明静なることは、前代ぜんだいにきいまだ聞かず」

ごころ

の心いかん。

こた えんどんしかん

答う。円頓止観なり。

と えんどんしかん ごころ

問う。円頓止観の意いかん。

こた ほっけざんまい いみよう

答う。法華三昧の異名なり。

問う。法華三昧の心いかん。

こた そ まっだい ほんぷ ほけきよう しゆぎよう こころ ふた あ
答う。夫れ、末代の凡夫、法華經を修行する意に二つ有

り。一には就類種の開会、二には相對種の開会なり。

問う。この名は、いづれより出ずるや。

こた ほけきようだいさん やくそうゆほん い しゆ そう たい しよう
答う。法華經第三の藥草喩品に云う「種・相・体・性」

の四字なり。その四字の中に第一の「種」の一字に二つあ

り。一には就類種、二には相對種なり。その就類種とは、釈

に云わく「およそ心有るものは、これ正因の種なり。一句

を隨聞するは、これ了因の種なり。頭を低れ手を挙ぐる

は、これ縁因えんいんの種たねなり」等とう云々うんぬん。その相對種そうたいしゆとは、煩惱ぼんのうと業ごう
と苦くとの三道さんどう、その当体とうたいを押おさえて法身ほつしんと般若はんによと解脱げだつと称しよう
する、これなり。

その中に、就類種じゆるいしゆの一法いつぽうは、宗しゆうは法華經ほけきやうに有ありといえど
も、少分しょうぶんはまた、爾前にぜんの經きやうぎやう々つうにも通みようちやくず。妙樂みょうらく云いわく

「別教べつきやうはただ就類じゆるいの種たねのみ有あつて、相對無そうたいなし」云々うんぬん。この
釈しゃくに別教べつきやうと云いうは、本もとの別教べつきやうにはあらず。爾前にぜんの円えん、あ

るいは他師たしの円えんなり。また、法華經ほけきやうの迹門しゃくもんの中なか、「舍利しやりを
供養くやうす」已下いげ二十余行にじゆうよぎやうの法門ほうもんも、大体だいたい就類種じゆるいしゆの開會かいえなり。

と そうたいしゆ ころ

問う。その相對種の心いかん。

こた しかん い えん ほう き しょうじ

答う。止觀に云わく「いかなるか、円の法を聞くこと。生死

そくほっしん ぼんのうそくはんによ けつぎようそくげだつ き みつ なあ

即法身・煩惱即般若・結業即解脱なりと聞く。三つの名有

みつ たいな いったい

りといえども、三つの体無し。これ一体なりといえども、三

な た みつ すなわ いっそう じつ こと

つの名を立つ。この三つ即ち一相にして、その実、異なり

ほっしん くきよう はんによ げだつ くきよう

あることなし。法身、究竟なれば、般若も解脱もまた究竟な

はんによ せいじよう よ せいじよう げだつ じざい

り。般若、清浄なれば、余もまた清浄なり。解脱、自在な

よ じざい いっさい ほう き

れば、余もまた自在なり。一切の法を聞くこと、またかく

みな ぶつぼう ぐ げんしょう

のごとし。皆、仏法を具して、減少するところなし。これ

えん き な どううんぬん しやく すなわ そうたいしゆ
を円を聞くと名づく」等云々。この釈は、即ち相對種の

てほん
手本なり。

こころ
その意いかん。

こた しょうじ われ くか えしん ごおん
答う。生死とは我らが苦果の依身なり。いわゆる五陰・

じゆうににゆう じゆうはつかい ぼんのう けんじ じんじや むみよう さんわく
十二入・十八界なり。煩惱とは見思・塵沙・無明の三惑な

けつごう ぎやく じゆうあく しじゆうとう ほつしん ほつしんによらい
り。結業とは五逆・十悪・四重等なり。法身とは法身如来、

ほんにや ほうしんによらい げだつ おうじんによらい われ しゆじよう むし
般若とは報身如来、解脱とは応身如来なり。我ら衆生、無始

こうごう このかた さんどう ぐそく いま ほけきよう あ さんどう
曠劫より已来、この三道を具足し、今、法華経に値つて三道

そくさんとく
即三徳となるなり。

難じて云わく、火より水出でず、石より草生ぜず。悪因

あつか かん ぜんいん ぜんぼう しょう ぶつきよう さだ なら

は悪果を感じ、善因は善報を生ずるは、仏教の定まれる習

われ こんぽん たず きわ ふぼ

いなり。しかるに、我らその根本を尋ね究むれば、父母の

しょうけつ しゃくびやくにたいわごう いっしん あく こんぽん ふじよう

精血、赤白一滯和合して一身となる。悪の根本、不浄の

みなもと たいかい かたむ あら しょうじよう

源なり。たとい大海を傾けてこれを洗うとも清浄なる

くか えしん こんぽん さぐ み

べからず。また、この苦果の依身は、その根本を探り見れ

とん じん ち さんどく い ほんのう くか にどう

ば、貪・瞋・癡の三毒より出ずるなり。この煩惱・苦果の二道

ごう かま ごうごうすなわ けつばく ほう たと

によつて業を構う。この業道即ちこれ結縛の法なり。譬え

かご い とり さんどう

ば籠に入れる鳥のごとし。いかんぞこの二道をもつて

さんぶつ しょう

たと

ふん あつ

せんだん つく

三仏因と称するや。譬えば、糞を集めて梅檀を造れども、

ついで かんば

終に香しからざるがごとし。

こた

なんじ

なん

おお

どうり

われ

わきま

答う。汝が難、大いに道理なり。我、このことを弁え

ふほうぞう

だいじゆうさん

てんだいだいし

こうそ

りゆうじゆ

ず。ただし、付法蔵の第十三、天台大師の高祖たる竜樹

ぼさつ

みようほう

みよう

いちじ

しゃく

たと

だいやくし

よ

菩薩、妙法の妙の一字を釈して、「譬えば、大薬師の能く

どく

くすり

とううんぬん

どく

なにも

毒をもつて薬となすがごとし」等云々。「毒」というは何物

われ

ぼんのう

ごう

く

さんどう

くすり

なにも

ほつ

ぞ、我らが煩惱・業・苦の三道なり。「薬」とは何物ぞ、法

しん

はんにか

げだつ

よ

どく

くすり

なにも

身・般若・解脱なり。「能く毒をもつて薬となす」とは何物

さんどう

へん

さんとく

てんだい

みよう

ぞ、三道を変じて三徳となすのみ。天台云わく「妙は

ふかしぎ な とううんぬん い そ いっしんないし

不可思議に名づく」等云々。また云わく「夫れ、一心乃至

ふかしぎきょう こころ あ とううんぬん そくしんじようぶつ もう

不可思議境、意ここに在り」等云々。即身成仏と申す、

きんだい けごん しんごんとう ぎ ぬす と

これはこれなり。近代の華嚴・真言等、この義を盗み取つ

わ もの だいちゆうとう てんか ぬすびと

て我が物となす。大偷盜、天下の盗人これなり。

と い ほんぷ くらい ひほう こころ し

問うて云わく、凡夫の位もこの秘法の心を知るべきや。

こた わたくし こた せんな りゆうじゆぼさつ だいろん くじゆうさん

答う。私の答えは詮無し。竜樹菩薩、大論（九十三な

い いま ろじん あらかんかえ さぶつ い

り）に云わく「今、『漏尽の阿羅漢還つて作仏す』と言うは、

ほとけ よ し ろんぎしや まさ ろん

ただ仏のみ能く知ろしめす。論議者は正しくそのことを論

ずべきも、測り知ること能わず。この故に応に戯論すべか

はか し あた ゆえ まさ けろん

らず。もし仏ほとけを求め得る時とき、乃すなわち能く了知りようちす。余人よにんは信しんず

べきも、しかもいまだ知るべからず」等とううんぬん云々。この釈しゃくは、

爾前にぜんの別教べつきようの十一品じゆういつぽんの断無明だんむみよう、円教えんぎようの四十一品しじゆういつぽんの断無明だんむみよう

の大菩薩だいぼさつ、普賢ふげん・文殊等もんじゆとうもいまだ法華經ほけきようの意こころを知らず、い

かにいわんや蔵ぞう・通二教つうにきようの三乗さんじようをや、いかにいわんや末代まつだい

の凡夫ぼんぷをやという論文ろんもんなり。

これをもつて案あんずるに、法華經ほけきようの「ただ仏ほとけと仏ほとけとのみ、

いまし能く究尽よくくじんしたまえり」とは、爾前にぜんの灰身滅智けしんめつちの二乗にじようの

煩惱ぼんのう・業ごう・苦くの三道さんどうを押さえて法身ほっしん・般若はんにや・解脱げだつと説とくに、

にじようかえ

さぶつ

ぼさつ

ぼんぷ

しやく

二乗還つて作仏す、菩薩・凡夫もまたかくのごとしと釈す

ゆえ

てんだい

にじよう

こんぱい

な

どく

るなり。故に、天台云わく「二乗の根敗、これを名づけて毒

こんきよう

き

う

すなわ

どく へん

くすり

となす。今経に記を得るは、即ちこれ毒を変じて薬とな

ろん

い

よきよう

ひみつ

ほっけ

ひみつ

す。論に云わく『余経は秘密にあらず、法華はこれ秘密な

とううんぬん

みようらくい

ろん い

だいろん

り』と「等云々。妙楽云わく『論に云わく』とは大論な

うんぬん

り」云々。

と

問う。かくのごとくこれを聞いて、何の益有るや。

こた

い

はじ

ほけきよう

き

みようらくい

答えて云わく、始めて法華経を聞くなり。妙楽云わく「も

さんどうすなわ

さんどく

しん

よ

にし

かわ

わた

し三道即ちこれ三徳と信ぜば、なお能く二死の河を渡る。

さんがい

うんぬん

まつだい

ほんぷ

ほうもん

き

いわんや三界をや」云々。末代の凡夫、この法門を聞けば、

われいちにん

じょうぶつ

ふぼ

そくしんじょうぶつ

ただ我一人のみ成仏するにあらず、父母もまた即身成仏

だいいち

こうよう

せん。これ第一の孝養なり。

びょうしん

ゆえ

いさい

もう

病身たるの故に委細ならず。またまた申すべし。

けんじしねんたいさいつちのえとらにがつにじゅうはちにち

にちれん

かおう

建治四年太歳戊寅二月二十八日

日蓮

花押

とぎどの

富木殿